

灰となり、狩人となりし独奏曲 ～カデンツァ～

荒潮提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは狩人となり、灰となり、火を継いだ王となった者の物語。

マリアさん（中身オリ主）が魔術、呪術、奇跡とかソウルシリーズ、Bloodborneの武器で無双するお話です。

※作者はソウルシリーズ、Bloodborne、隻狼を全てをプレイしているわけではありません。

その為どっか間違えてたりするかもですが暖かい目で見守ってください。

目次

プロローグ	1
1話「帰還、接触」	4
2話「新たな狩人」	9
3話「車輪盾使いたいです!」「やめときなさいどっかの玉葱じゃないんだから」	12
4話「狩人さんちの今日のごはん」	15
5話「ノイズ殺すべし、慈悲はない」	19
6話「挨拶代わりのガトリング」	25
7話「再会のお日様と陽だまり。響の初めての狩り」	29
8話「激突、狩人と防人」	33
9話「接触、特異災害機動2課」	37
10話「自己紹介と一悶着」	43
11話「狩人vs装者」	46

プロローグ

ー セレナ・・・約束よ・・・私は絶対に帰って来るから・・・ ー

ー マリア姉さん?! いやあ!? 逝かないで! ー

「・・・懐かしい夢を見たわね」

狩人の夢、その中にある花畑の奥にある巨大な木の根本で目を覚ます1人の女性。

ピンク色に所々血で染まったように濃くなつた部分があり途中から短く斬られた特徴的な髪型をしている髪、左の肘から先が骨になつておりそこに縄や数々の仕込み武器を内蔵した義手、闇に紛れるような黒い装束、何かにやられたのかえぐられた様な傷跡の残る左目を隠す様に付けられた包帯。

彼女はマリア・カデンツアヴナ・イヴ、本来であればアイドル大統領と呼ばれフロンティア事変を起こす筈の人である。

木の根本から起き上がった彼女は今の自宅である狩人の悪夢内にある家に向かう。

向かう前に大樹の根本、先程まで寝ていた場所の隣にあつた墓石変わりの鎌と変わった形の銃に祈りを捧げる。

そこに眠るのはかつて彼女に獣狩りの技術を教え、この悪夢に囚われ続け自らが犠牲になる事で幾多の狩人を導き続けた最初の狩人にしてマリアの師であり祖父、父代わりとしてこの世界に來たまだ幼いマリアを育てたマリアの大切な家族であり戦い、この悪夢から解放した人物、古き狩人ゲールマンの墓である。

月の魔物との戦いの後に彼女が人形と共に作り上げた簡素な墓である。

花を供え立ち去るマリア。

歩きながら今まで自分が歩んできた道のりを思い出していた。

「(思えば転生してから色々あったわね……。前世から数えてもう40数年、そろそろ帰らないとね……。)」

そう、彼女は本来の彼女ではない。

前世ではソウルシリーズを始めとするフロム・ソフトウェアのゲームの大ファンであり特にアーマード・コアシリーズの続編をずっと待っていた冴えないサラリーマンだった。

シンフォギアもA X Zから見始めてマリアに惚れて全シリーズ一気見したのであった。

ある日、車に轢かれそうになった子供の身代わりとなり死に転生する事となった彼は特典としてソウルシリーズの魔術、呪術、奇跡、武器、防具にBloodborneの武器、防具、アイテム一式と自分のプレイしていた時のカンストステを選択。

しかし、それを得るには一度転生し改めて自分の力で得る事が条件だった。

彼はそれを了承、最後にマリア・カデンツァヴナ・イヴとして転生させてくれと頼み転生した。

そして運命のあの日、マリアはセレナの身代わりとなり死にBloodborneの世界の狩人の夢にある大樹の下に現れた。

その後はゲールマンと人形の元で育てられ狩人として身体を鍛え、獣を狩る技術を学び獣を狩り続け、戦いの最中で左目を失った。

そして狩り続けた先で全ての真実を知りゲールマンと対峙、それに勝利。

現れた月の魔物をも狩り上位者となった。

その後、ロスリック、マデューラ、ロードランを駆け巡り最終的にデモンズ・ソウルの世界で古き獣を狩った際になり損ないのオーラントの一撃を喰らってしまい左腕が斬り飛ばされてしまった。

勿論即殺したがその直後に別の世界に飛ばされてしまった。

その場所は芦名、竜胤と呼ばれる物を求め争いを続ける国であった。

そこでマリアは左腕をとある仏師に出会い義手にしてもらったのであった。

狼と呼ばれる男と斬り合い友となり篝火を灯して彼女は夢へと帰還した。

そして今、彼女は元いた世界へと帰還する準備を始める。
必ず帰ってくるという約束を果たす為に。

「行かれるのですね、狩人様」

「ええ、でも偶には帰ってくるわよ。私のもう一つの帰る場所なんだから」

「では、行ってらっしゃいませ狩人様」

「行ってきます」

こうして彼女は帰還した。

不死の力とソウルの力を持ち、血の狩人となって。

1話 「帰還、接触」

とある人気のない空き地、そこに突如現れた篝火。

篝火からワープしてきた MARIA は篝火に刺さっている螺旋の剣を抜き背中に背負う。

念の為剣道の竹刀が入っている袋みたいな物を作り中に螺旋の剣を入れておく。

左腕に内蔵されている鉤縄をビルに向かって撃ちビルの上に登る。

懐かしき都会の空気、それを感じながら MARIA は辺りを見回す。

するとそう遠くない場所に見覚えのある建物が見えた。

アレはツヴァイウイングの悲劇と呼ばれる事件が起きた場所、戦姫絶唱シンフォギアという作品の始まりとも言える場所だ。

天井が開いて羽根のようになっていた事から恐らくもうすぐあの悲劇が始まるのだろう。

思いつきり帰ってくる時代を間違えたと感じた MARIA はため息を吐いた。

しかし、既に自分という異物がいる世界。

多少の改変は致し方ないだろうと考え鉤縄を駆使してアリーナに向かう。

せめて犠牲者を増やさないようにする為に。

「MARIA・・・いえ、今はこう名乗りましょう。リア・アッシュ・ブラッドの狩りを知るがいい」

さあ薪の王として、月の狩人として人を脅かす雑音を狩ろう。

それが転生者としてこの世界の異物となった私のやるべき事なのだから。

「ノイズだー!？」

「いやあああああああ!？」

「退いて！私が先に逃げるのよー！」

「ちよっ！押すなー！」

我先にとノイズから逃げる人々。

狭い通路に人が殺到して潰れている人もいる。

突然その入り口を閉めていたシャッターがこじ開けられた。

マリアがその馬鹿力で開けたのだ。

そして我先にと出ようとする人達を一喝した。

「狼狽えるな！落ち着いてここから出る！」

「あ、ありがとう！」

「助かったわー！」

ああ、感謝を言われたのは何年ぶりだろうか。

マリアは各入り口を回りシャッターをこじ開け続けていく。

邪魔をするノイズはノコギリ鉋で屠り、エヴェリンで撃ち抜く。

ある程度避難が完了した時マリアは会場内部に突入、連射クロスボウに破裂ボルトを装填しばら撒きノイズを倒す。

そのままファランの大剣を構え飛び上がり正にある少女が後ろにいる少女をノイズから守ろうと立ちはだかったその前に飛び出し一
刀の元に斬り捨てた。

突然の乱入者に困惑する少女、マリアはそんな少女を横目に左手に妖木の枝を構えてソウルの奔流を発射しノイズを殲滅する。

その後も竜狩りの剣槍やデーモンの大斧、ストームルーラーなど高火力戦技やスペルでノイズを殲滅する。

飛んでいるノイズにはガトリング銃と連射クロスボウを撃ち、小型ノイズが飛びかかってくればソウルの大剣でなぎ払う。

まさに蹂躞であった。

巨大なノイズが踏み潰そうとしてくるが彼女は避けようともせず逆に大砲でその足を撃つて破壊、ストームルーラーの戦技で消滅させる。

気づけば既にノイズは全滅しており残っているのはマリアと先程まで戦っていた2人の少女と足を挫き倒れている少女だけだった。

武器を降ろし一息入れようとした刹那、殺気を感じ取り獣狩りの短銃を取り出し後ろに向ける。

右手にはノコギリ鉋を握っている。

短銃の先には刀を向けている蒼い髪の少女がいた。

「何か用か、貴公。刀を向けられる事などした覚えは無いが」

「・・・貴方は一体何者ですか？シンフォギアを使っていないのにノイズを・・・。とにかく、一緒に来てもらいます」

「断る・・・と、言えば？」

「力づくでも連れて行きます！ハッ！」

「おっと」

斬りかかってきた少女を軽くステップで避け、逆にノコギリ鉋で斬りかかるマリア。

受け止められるがマリアはそれを分かって斬りかかり至近距離でお手製の煙幕を投げつけた。

突然の行動に少女、風鳴翼は反応が遅れてしまいその隙にマリアはカンストステによる脚力で足を挫いている少女、立花響に向かって駆ける。

それを見たオレンジの髪の少女、天羽奏は傷ついた身体に鞭を打ち響に向かう。

もし奴が彼女に何かするのなら守らなければ、しかしマリアは何かするのではなく懐から湿布と包帯を取り出し彼女を治療していた。

「はい、これで大丈夫」

「あ、ありがとうございます・・・。あ、あの！貴方は・・・？」

「通りすがりの謎のお姉さんよ。それより貴方、一緒に来ない?」
「ふえ?」

「貴方はこれから過酷な運命に巻き込まれていくかも知れない、大切な友達と戦う事があるかも知れない・・・大切な人を守れずに手に掛けてしまうかも知れない。貴方が望むのなら私が戦う力をあげる。戦う術を教えあげる。手を繋ぐ事を諦めない力をあげる。その代わり貴方は人で無くなるかもしれない。それを望むなら、この手を取りなさい。貴方が望まないのならそれでも構わないわ・・・どうする?」
「私は・・・」

響は考える。

自分の大切な友達を傷つけてしまうかも知れない未来の可能性を知っても尚、自分は前を向けるのだろうか?

立ち上がれるのだろうか?

難しい事なんて分からないし人で無くなる事は怖い。

けど友達を、未来を守る力が欲しい。

守る力が欲しい!

「私、難しい事なんて全然分かりません。けど、それがどれだけ過酷だとしても私は友達を、未来を守りたいんです!だからお願いします。私を、強くしてください!」

「・・・よく言ったわ。ようこそ、新たなる狩人よ」

「お、おい待て!その子を何処に連れて行く気だ!」

「この子を貴方達に関わらせるにはまだ早いわ。心配しなくても危害は加えないわよ。それより、貴方達はこの惨劇で起こり得る生き残った人達へのバッシングや誹謗中傷とかを対処するべきではないか?」
「っ!?そ、それは・・・」

「・・・そちらの司令官に伝えろ。ただのバッシングや誹謗中傷と思うな。エスカレートすればそれは凶器のない殺人となるとな」

それだけ言いマリアは左手で響の手を掴み右手にはタリスマンを

持ちスベル「家路」を唱えロスリックに帰還する。

奏は手を伸ばすが届く事はなかった。

ようやく煙幕の中から出てきた翼は呆然としていた。

その頃マリアは祭祀場の篝火の前にいた。

隣には響がいる。

響は一瞬で別の場所に来たことに驚いている。

マリアは響の手を引き祭祀場を回る。

「おかえりなさい灰の方・・・おや？そちらのお嬢様は？」

「ただいま火守女。彼女は・・・（一応知ってるけど聞くか）そう言えば名前を聞いていなかったわね」

「は、はい！立花響です！」

「そう、響ね。彼女は私が連れてきた。暫く祭祀場と夢で私が鍛えるわ」

「なるほど。わかりました、皆に伝えておきます」

「お願いね。では、響」

「は、はい！」

「改めてようこそ、ロスリックへ」

2話 「新たな狩人」

「さて、響。修行するにあたって先ずは貴方にあつた武器を見つけてもらおうわ」

「武器・・・ですか？」

「そう、敵を倒すにも身を守るにも武器は必要よ。扱い易いのはロングソードだけど・・・人によってはこんな特大の武器や魔法をメインに戦う人もいるわ」

「お、大きい・・・」

「これは煙の特大剣、こっちはスモウの大槌よ。魔法は・・・こういうのね。一番簡単な奴だけど」

そう言うとマリアは左手に触媒の呪術の火を装備し小さな火球を生み出す。

響は「おー」と言いながらその火球を見ていた。

※ちなみにマリアはあまりスペル関連は使いません。

使っても回復系かエンチャ系ぐらいです。

たまに奔流とかで薙ぎ払ったりはしますが。

「まあ、呪術とかはまた今度ね。とりあえず今は狩人としての武器とここロスリックとかで戦う武器を選んでもらおうわ。私のオススメはこのノコギリ鉋と獣狩りの短銃、それからコレねロングソード」

そう言つてマリアはズラッと武器を並べて行く。

普段から大量に持ち歩いているが一体何処にそれだけの武器が入っているのか、というか物理的に入らないはずの武器まで出てきていた。

祭祀場に並べられるだけの武器を並べたマリアは響を呼び選ばせる。

「貴方が一番コレだ！と思う武器を探しなさい。貴方にそれあげるわ」

「ええ!?いい、良いんですか!?これ全部マリアさんのじゃ・・・」
「ぶつちやけ有っても全部が全部使わないのよ。だから使ってくれる人がいるなら武器も喜ぶわ」

(※ダクソプレイヤーあるある。武器があっても使わないのが多い)
「ほえー・・・。これも良いなあ・・・。でもこつちも・・・」
「ゆつくり見なさい。時間はあるわ」

響が武器を選んでいる間にマリアは祭祀場を離れロスリックからロードランに転移した。

ここに来た目的はかつて彼女と交友を深め彼女の数少ない友となり太陽を愛したある男の墓参りに来たのだ。

その男の名前はソラール、太陽を愛した太陽の戦士だ。
墓のある場所は彼と初めてあった場所、太陽の誓約を結んだあの場所だ。

墓と言っても彼の愛用の剣と兜だけで作った簡素な物だ。
不死となった者達は死ぬと灰になる。
その為死体は残らず彼が直前に渡した剣と兜だけが遺品だ。

「久しぶりねソラール・・・我が友、太陽の戦士よ。貴方は今どうしているのかしらね・・・。私はあれから色々会ったわよ・・・今でも思い出すわ。貴方を介錯した時の事を」

そう、彼女はソラールが太陽虫に寄生されて正気を失い彼女に襲いかかり戦い最終的に正気を取り戻したが彼はもう誰かを襲わない様にと頼まれ彼の首を撥ねた。

『頼む貴公よ・・・俺が俺である内に俺を殺してくれ。俺が亡者となり誰かを襲わない内に・・・こんな事を頼めるのは貴公しか居ないんだ・・・だから頼む』

『ソラール・・・分かったわ・・・!』

『最期に一つだけ、俺の兜と剣をあの場合に捧げておいてくれ。貴公

と出会い、太陽の誓約を交わしたあの場所に……」

『……っ！いくわよ？』

『ああ、これでようやく解放される……今度は太陽を、翳り一つない本当の太陽を見たいなあ……』

『う、うわああああああああああああ!!』

マリアは約束を守り太陽誓約を結んだあの場所に彼の兜と剣を捧げた。

今でも定期的に彼の墓参りをしている。

その時には必ず彼と会っていた時に必ず飲んでいた酒を持っていき供えていた。

そして彼女は酒を飲みながら呟く、「太陽万歳」と。

「……さて、そろそろ帰らなきゃ。また来るわね、ソラール」

『また来るといい、友よ』

「……ソラール?……気のせい?」

太陽が聞こえさせた幻聴か否か、だが確かにソラールの声が聞こえたのだ。

しかし、その声も風に流れて消えていってしまった。

マリアはしばらく佇むとロスリツクの祭祀場に戻った。

祭祀場に戻ると響が武器の素振りをしていた。

使う武器が決まったようである。

「武器、決まったようね。しかし……よりによってそれかあ……(ま

あ、彼女の原作での戦い方見てたら分かっては居たけど……)」

「あ、マリアさん!なんだかこの武器、とても使いやすいです!」

「そう、それは良かったわ。じゃ、次の段階に行きましょうか?」

「はい!」

「次は実戦訓練よ。武器の使い方、文字通り死んで覚えなさい」

「……へ?」

3話「車輪盾使いたいです!」「やめときなさいどつかの玉葱じゃないんだから」

「さあ、構えなさい響。隙を見せれば死ぬわよ」

「いきなり過ぎて付いていけないんですがあ!?!」

花とその周りを崩れた建物だけが存在する闘技場。

「不死の闘技」と呼ばれるこの場所にマリアは響を連れて来てツヴァイヘンダーと黒騎士のグレイブを持ち響に殺気を向けていた。

響は突然向けられた殺意に怯えるが不器用ながらも武器を持つ。

響が選んだ武器はデーモンナツクル、セスタス、骨の拳、ガラシヤの拳、パイルバンカー、獣狩りの散弾銃だ。

見事に拳系武器ばかりである。

因みに防具に関してはマリアが昔愛用していたヤーナムの狩人一式を着せている。

なお何故ツヴァイヘンダーと黒騎士のグレイブなのかと言うと単純に作者の愛用武器だからである。

因みに腰にはアヴェリンをぶら下げている。

「私はこの・・・円の中からは動かないわ。来なさい」

「は、はいーそれじゃ・・・行きますー!」

デーモンナツクルとセスタスを腕につけ走り出す響。

マリアに届くまで後数メートル・・・といった所でマリアがツヴァイヘンダーを両手持ちにして振り上げる。

しかし既にデーモンナツクルの間合いに入っている響の方が早いと思っただが直後、ツヴァイヘンダーが力任せに響に叩きつけられた。

頭からお尻まで真っ二つに叩き斬られた響は即死、しかし直ぐに場外で復活した。

響は死んだ筈の自分が生き返った事に驚いたが自分が死んだ瞬間

「す、すみません・・・でもロスリックじゃないんですか？」
「ええ、私の育った家。全ての狩人の帰る場所。狩人の夢にね」

4話 「狩人さんちの今日のごはん」

「着いたわよ響、起きて」

「・・・むにや・・・ふわあ・・・おはようございます・・・」

「起きたわね寝坊助さん。さあ、こつちよ」

「わあ・・・綺麗な花畑・・・」

「ここが幾多の狩人の夢見る場所であり始まりの場所。「狩人の夢」よ」

白い花と幾多の墓標が立ち並ぶ美しくも哀しき夢。

マリアは背中から響を降ろし育った家へと向かう。

その途中にある階段にある物が座っているのに響は気がついた。

それは側からみれば本物と見間違うほど精巧に作られた人形だった。

その人形はマリア達が近づくと顔を上げて立ち上がった。

突然動き出した人形に驚き尻餅をつく響、だがマリアはその人形を見て呑気に挨拶をしていた。

「お帰りなさいませ、狩人様。・・・あら？そちらのお嬢様は？」

「ただいま人形。この子は今日狩人になったばかりの新米で私の弟子よ。人形、暫くこの子を見て貰っても良い？私はご飯の用意するから」

「かしこまりました狩人様。それではこちらに・・・新たな狩人様」

「は、はいー！」

マリアは人形に付いていく響を見送り自分は戦場に立つ。

そう、台所という戦場に。

まず地下にある保管庫から巨大な塊肉と野菜を取ってきて肉を食べやすい大きさのステーキにカット、そして事前に油を引いて砕いたニンニクを焼いたフライパンで焼いていく。

因みにこの肉はマリアが狩ってきた飛竜の肉でその喉元の肉であ

る。

(某型月ほのぼの料理漫画にて美味いと書かれていた)

焼いている間に野菜を切り鍋に入れてスープを作る。

もう1品レタス、トマト、焼いた余った肉をパンに挟んでサンドイッチを作り完成である。

デザートにはアップルパイを用意してある。

出来た料理を食卓に並べていき準備は完了。

マリアはエプロンを外して裏の花畑にいる2人を呼びに行った。

こうしてみれば完全にok(タアーン)

マリアが料理をしている頃、響と人形は家の裏にある巨大な大樹の根本にいた。

人形が大樹の根本にあるゲールマンの墓の前で屈み話しかけていた。

「ゲールマン様、狩人様・・・、私達の大切な娘であるマリア様が新たな狩人を弟子として連れて来られました。あの子も成長しましたねゲールマン様」

「あの・・・人形、さん？このお墓って誰の何ですか？」

「このお墓はゲールマン様、マリア様達、狩人様達の助言者であり最初に狩人として戦われたお方が眠られる場所です。マリア様たっての希望でここにお墓を作りました」

「私も、挨拶しても良いですか？」

「ええ、構いませんよ。どうぞ」

「初めましてゲールマンさん、私は立花響です。まだ狩人になったばかりですけどマリアさんの下で強くなっていきます」

「ほう？まだ若いのがこれからが楽しみだな。頑張りたまえ

よー

「・・・？今誰かの声が・・・」

「2人共―！ご飯出来たわよー！」

「響様、行きましょう」

「は、はい・・・（今の声・・・何だったんだろう・・・気のせいだったのかな・・・）」

響が家に入ると（人形は階段前の定位置に戻った）美味しそうな匂いにお腹がグーグーへりんこファイヤーしだした。

「さあ、食べましょうか」

「お、おいしそう・・・」

「今日のメニューはドラゴンのステーキ、コンソメスープ、サンドイッチ、アップルパイよ。召し上がれ」

「い、いただきます！ハムツ！もぐもぐ・・・美味しい！とても美味しいですマリアさん！」

「そむ、お口に合って良かったわ。いただきます・・・ん、美味し」

「ところでマリアさん、ドラゴンのステーキって言っていましたけどドラゴンってほんとにいるんですか？」

「ええ、いるわよ。ドラングレイヴに直接行ってきて狩って来たんだもん」

「・・・何でもアリですねこの世界」

「今更よ響」

5話 「ノイズ殺すべし、慈悲はない」

「ねえ、響」

「なん……ですかマリア……さん！」

ある日、マリアと響の2人がいつもの様に不死の闘技で殺し合い（誤字に非ず）をしているとマリアが響にある提案をした。

ちなみに響はパイルバンカーで、マリアは葬送の刃で戦っている。

マリアが鎌に変形した葬送の刃で首を跳ねようとすると響はパイルバンカーで鎌の柄を弾き、響がパイルバンカーで殴りかかるとマリアは鎌を振り回しパイルバンカーを弾き葬送の刃を片手剣に戻す。

「そろそろ元の世界に帰らない？あれから向こうじゃ3年くらいは立ってるわよ？」

「確かに……！未来も心配……してますしッ！」

「とりあえず、先にコレを終わらせるわ！」

「はへっ？」

響の世界に帰る前に古い狩人の遺骨で加速して背後に素早く回り葬送の刃で響の首を跳ね飛ばして闘技を終わらせるマリア。

夢に帰った後に響から抗議されたマリアであった。

「まあ、貴方が帰る前に私が先に行って当面の拠点確保ととかしとくわ。兎にも角にも拠点無いと動けないでしょ？」

「未来に会いたいけどそれも大事ですよね……。分かりました、マリアさんが戻るまで待ってます！」

「でもその間ここ大丈夫かしらねえ……。貴方を信用していない訳じゃ無いけどアイツが私が居ない隙に来そうだしねえ……。(もし来たらもう一回殺してやろうかしら月の上位者め)」

「私だって狩人です……。まだまだ未熟ですけどそれでも私は狩人なんです。マリアさんが戻るまでここを守って見せます！」

「……ありがと、心強いわ。けどもう一人くらいは誰かいなかしらねえ……」

「私が居ようか？」

「だ、誰ですか？」

「あら、ヴェルクじゃない。珍しいわねここに来るなんて」

外でお茶をしながら今後の事を話していると紅い髪に小さめの帽子を被りとボロボロに見える服を着た女性の狩人が話しかけてきた。彼女の名前はヴェルク、普段は狩人の悪夢やヤーナムで獣狩りをしているマリアの友である。

彼女が使う武器は回転ノコギリやルドウィークの聖剣、月光の聖剣等の脳筋系や聖剣系である。

「お？初めましての子がいるわね。マリア、この子新しい狩人？」

「ええ、彼女は響。まだ未熟だけど私とやり合える位には実力あるわよ」

「あら、これは強敵かな？私はヴェルク、連盟に所属はしているけど名ばかりの所属の狩人よ。よろしくね後輩ちゃん」

「よ、よろしくお願います！」

「話を戻すけどヴェルク、どういう風の吹き回しよ。貴方がここを守るだなんて」

「気まぐれよ、私は貴方の友よ。たまにはそれくらいはしなないと。それに此処は私達、狩人達の帰る場所よ。守るのは当然よ」

「・・・それじゃ、暫く頼むわ。出来る限り早く帰る様にはするけど頼むわね。あ、ここにある物は好きに使っても良いわよ」

「ん、了解。任せて」

「さて、善は急げと言うし早速行ってくるわ」

「行ってらっしゃいマリアさん！」

人気のない場所に突如現れた灯り。

そこにマリアが現れる。

マリアは武器をしまい服装を違和感のない物に変更し拠点となる場所を探しに行った。

お金はヤーナムで集めた金貨を向こうで金塊に変えてそれを換金してもらおう予定だ。

数時間後……。

「ふう、とりあえずこんな物かしらね。最後に灯りを灯してつと……うん、バツチリ。さて……あの子が会ってもテンパらない様に会いにいけますか」

マリアは拠点に家具を運び込み灯りを灯しいつでも夢と行きき出れる様にしてマリアはある人物に会いに行つた。

暫く歩いていると辺りの空気が変わった。

マリアはいつもの狩装束に着替えエヴェリンと葬送の刃を構える。目も狩人としての目になり彼女の身に纏う空気が変わる。

その瞬間、彼女の周りに人類の敵であるノイズが現れる。

「……全く、余り事を荒立てたくは無いんだけど……。……何処も彼処も獣だらけ、私を殺そうと思うならもう少し骨のある奴を連れて来なさい。さあ、潰そう。さあ、鬻ろう。さあ、蹂躪しよう。雑音を狩り尽くそう」

飛びかかってくるノイズ。

それを剣で一閃し屠り、一呼吸おきマリアは眩く。

「リア^灰・アツシユ^{と血}・ブラッド^{の狩人}の狩りを知るが良い」

特異災害機動二課。

シンフォギアを用いて人類の敵であるノイズを倒す唯一の組織。

その司令室ではノイズ出現の一報を受け慌しく動いていた。

司令官である風鳴源十郎は指示を飛ばしながら3年前のあの女性から言われたことが胸の中で響いていた。

「ただのバッシングや誹謗中傷と思うな。エスカレートすればそれは凶器のない殺人となるとな」

「あの女性に言われた事があの後現実となった。そのお陰で対応が素早く出来たが・・・彼女に連れて行かれた少女、無事だろうか・・・」
奏と翼を急がせろ！住民の避難は！

「奏ちゃん達は既に現場に向かっています！住民の避難はもう直ぐ完了します！」

「こ、これは・・・!?し、司令！」

「どうした！」

「ノイズ出現ポイントにてシンフォギアとは別の反応を検知！3年前のあの反応です！」

「なんだとお!？」

「はああああああああああああ!!この程度なのか！ノイズというのは!?!この程度なぞヤーナムで獣を狩るより遥かに楽だ！」

葬送の刃でノイズを次々と屠るマリア。

少し離れているノイズにはエーブリエタースの先触れや太陽の光の槍で吹き飛ばし纏まったノイズがいれば雷の杭でチリにする。

完全に蹂躪であった。

数分もすればノイズは全て殲滅され辺りにはノイズだった灰が残っていた。

しかしマリアの狩人としての感がまだ終わっていない事を知らせていた。

古い狩人の遺骨で加速しノイズが残っているのを見つけたマリアは飛び上がりそのノイズの大群の先頭が追いかけていた少女2人に

襲いかかる直前、マリアが月光の聖剣を構えて落下攻撃で仕留めた。突然上から降ってきた人に驚き足が止まる2人。

その2人にマリアは優しく声をかける。

「足を止めないで。ここは私に任せて逃げなさい」

「は、はい！ありがとうございます！」

「お姉ちゃんありがとう！」

「ふふっ、ありがとうなんて久しぶりに言われたわね。さて、貴様らはここから1匹たりとも通さんぞ雑音ども！」

月光の光波でノイズ共を吹き飛ばすマリア。

さらに左手にも月光の大剣を握る。

両手の月光が美しく、眩しく光る。

まるで月の光の如く碧く。

「貴様らには勿体ないこの剣の輝き、導きの月光の光。受けるがいい！」

少女、小日向未来は途中で親と逸れた少女を連れて坂を走る。

後ろからノイズは追いかけてこないとはいえいつ来るか分からない。い。

だから走る。

坂の先、星が見えて街を一望出来る丘の上にたどり着いた未来。

この場所に隠れて時間を稼ごうと思った時、後ろから何か歩いて来る音が聞こえた。

振り返ると底には先程助けてくれた女性が灰だらけになって立っていた。

「貴方は、さっきの・・・先程は助けて頂いてありがとうございました」

「いえ、当然の事をしたままでよ。・・・それより貴方が小日向未来ね？」

「は、はい。そうですか・・・」

「ふふっ、響に聞いていた通り優しい子なのね」

「え？響を知っているんですか!?響は、響は今何処にいるんですか!?」「落ち着きなさいな。彼女は生きていますわよ。私が助けて鍛えている

の。・・・ごめんなさい、どうやら時間が無いみたい。続きはこの場所から明日の昼14時頃にね。それじゃ！」

「あ、あの待ってください！・・・行っちゃった。明日、ここに行けば響の事聞けるんだよね・・・」

未来はポケットにマリアから渡された紙を仕舞う。

マリアは未来から離れた数分後に来た二課の装者から逃げる様に身体を透明にする青い秘薬を飲み身体を透明にして拠点に戻る。

準備は整った。

さあ、始めよう。

獣狩りの時間だ。

6話 「挨拶代わりのガトリング」

「だああああああああああああああああああ!!!なんでこうなるかなああああああああああああああ!!!」

「り、リアさん後ろー!」

「ああ、もう!挨拶代わりにこいつでも喰らいなさいゴリラノイズ!」

走りながら後ろに向けてガトリング銃をぶつ放すマリア。

その先にはゴリラみたいに筋肉ムキムキマッチョマンのノイズが周りの建物や車を破壊しながらマリアと右腕に担がれている未来を追いかけていた。

何故こうなっているかというそれはほんの数十分前に遡る。

拠点で目を覚ましたマリアは食事を取り未来との約束の時間まで辺りの情報収集を兼ねてネカフェでパソコンを弄っていた。

「・・・ダメねえ、ノイズに関する情報は私が知ってる原作知識しか出てこないわね・・・。ツヴァイウィングの事も調べたけどやっぱりあの事件起きてたのね・・・忠告のお陰で原作よりかは大分マシにはなってるみたいね・・・はむっ。以外と美味しいわねネカフェご飯も」

存分にネカフェを満喫していたマリアであった。

時間が近づいて来たのでネカフェから出るマリア。

食べ足りなかったのかコンビニで唐揚げ串を買って食べながら約束の場所へと向かう。

一応正体はバレないとは思いますが念の為自分好みに改造したヤーナムの狩装束一式を装備しておく。

腰布の内側に落葉を隠し、エヴェリンを懐に忍ばせておく。

約束の場所に着き、追加で買って来てたポテトを齧っていると未来がやって来た。

「お、お待たせしました・・・」

「ううん、大丈夫よ。私もさつき来たところだから。自己紹介が遅れたわね。私はリア、リア・アツシュ・ブラッドよ。よろしくね未来」
「は、はい！よろしくお願いしますリアさん・・・あ、あの！響は、響は今どこにいるんですか!？」

「落ち着きなさいな、あの子は無事よ。今も私の家にいるわ」

「響・・・良かったあ・・・！無事で良かったあ・・・！」

「ほんとに響の事が大好きなのね・・・こうして見ると。お互い依存しているとも取れるけど・・・）どうする？会いたい？」

「はい！合わせてください響に！」

「分かったわ・・・!?!捕まってる！」

「ふえ？きやああああああ!?!」

マリアが未来を担ぎ上げ左手に懐に忍ばせておいたエヴェリンを握り飛び上がった直後、地面が砕けた。

マリアは襲撃者に向けてエヴェリンから水銀弾を数発撃つがまるで効果が無くこちらを向く。

ソイツはまるでゴリラのように筋肉ムキムキなノイズだった。

普段ならスモウの大槌とかで潰しにかかるのだが今は右腕に未来を担いでいるため分が悪いと判断したマリアは左手のエヴェリンを素早くガトリング銃に変更、地面に降りた直後にダッシュでゴリラノイズから離れる。

ゴリラノイズも破壊活動をしながら後を追いかけてくる。

そして冒頭に繋がる。

「あのリアさん！」

「何未来！話すなら手短にね！」

「なんで私の名前を知ってたんですか？」

「響から聞いた！以上！（それよりコイツにこのまま追いかけてらるとジリ貧ね・・・仕方ない）未来！」

「は、はい！」

「ちよつと空中自由落下の旅に行つてらっしゃい！そおい！」

「ふえええええええええええええええええええええええ!?」
「オラこいやゴリラア!」

未来を空へと潜影蛇手したマリアはゴリラノイズを挑発、その挑発に乗ったのか咆哮して突撃してくるゴリラノイズに向けて骨髓の灰を装填した大砲を構えて撃つ。

派手な爆発を起こし吹き飛ぶゴリラノイズ。
落ちて来た未来を右手でキャッチする。

「よつと、大丈夫?未来」

「ふにゆう・・・」

「・・・やり過ぎたわ」

気絶した未来を拠点に連れ帰り介抱するマリア。

未来が寝ている間に狩人の夢に戻り響を呼びに行く。

「戻ったわよー」

「あ!お帰りなさいマリアさん!」

「お帰り、リア。以外と早かったわね」

「直ぐ向こうに戻るけどね。響、準備して。行くわよ」

「はい!」

「んじや、私も行くわ。悪夢に狩りに戻らなきや」

「・・・ちゃんと帰って来なさいよ。貴方を殺すなんて私は嫌よ」

「心配しなさんな、私はまだ正気だよ。それじゃあね」

「・・・行っちゃいましたね」

「そうね・・・(ヴェルク、貴方が血に酔ってしまったのなら私が狩るわ。友としてね)さっ、行きましよう?貴方にとって今一番会いたい人が待ってるわよ」

「もしかして!」

「ええ、貴方の想像通りよ。準備は出来た?出発するわよ。人形、留守の間ここを頼むわね」

「はい、承りました狩人様」

「行きましょうマリアさん！」

「ええ、それと向こうではリアと呼んでね？マリアだとちよつと色々誤解されそうだから」

「分かりました・・・？」

「（・・・ああは言ったけど正直大分血に酔い始めてるのよね・・・。ごめんリア。正気ではいられなくなるのも近いかも・・・）ああ、匂い立つ。血に酔った狩人の匂いがする。堪らぬ匂いで誘うものだ。えづくわねえ・・・ああ、虫を狩ろう。人の中に淀み潜む穢れた虫を」

また、一人の狩人が悪夢に囚われる。

血に酔い狩りに酔いしれる狩人は皆悪夢に囚われるのだ。

だが、それでも彼女は未だ正気であった。

7話 「再会のお日様と陽だまり。響の初めての狩り」

「着いたわよ」

「ここが・・・拠点ですか？」

「ええ、暫くはここで過ごすわ。金銭面は心配しないで、金塊売ったらそれなりに入ったから」

「ほへー・・・あ、そういえば未来は何処ですか？」

「気絶しちゃったから奥の部屋で寝かせてるわよ」

「へ？」

「・・・ごめん、ちょっと空中自由落下の旅に行ってもらったら・・・」

「何してんですかりアさああああああああああん!？」

「ほんとにごめんなさい」

「(カタツ) 響・・・？」

騒がしかったのか起きて来た未来。

その目には涙を浮かべていた。

響はマリアに怒っていたのも忘れて未来を見つめ歩み寄る。

未来も響を見つめる。

そのまま響は未来を抱きしめて泣き出した。

「未来・・・やっと、やっと会えた・・・!ごめん・・・!ずっと一人ぼっちにさせちゃって・・・!」

「ううん、こうして会えたんだもん・・・!それで良いよ。お帰り、響」

「ただいま、未来!」

「(リアルひびみく万歳)」

全く持つてその通りである。

しばらくして・・・。

「・・・お二人さん、いつまで抱き合ってるつもりなのかしら?」

「あともう少しだけ・・・」

「・・・ふんすつ（ガララララララッ!）」↑ローゲリウスの車輪回転
中

「すぐ離れます!」

「さて、これからどうしましょうかねえ……。ノイズは見つけ次第ぶつ
殺すとして響は……。年齢的に補導されかねないわね……。未来を
巻き込む訳にも行かないし……」

「もう半分巻き込まれてるような物ですよリアさん」

「デスヨネー」

「なら今日はここでゆっくりs（ドカーン）……。出来そうに無いです
ね」

「行くわよ響。狩りの時間よ」

「はい!」

「響……」

「大丈夫だよ未来、ちゃんと帰ってくるから。だから待ってて?」

「……。うん、分かった。待ってるね、響」

「未来、行つて来ます!」

ノイズ発生現場では既に翼達、二課の装者達が戦っていた。

だがノイズの数が多く苦戦を強いられていた。

二課本部でも何とかしようと思いを飛ばし住民の避難を急がせて
いるが中々進まない。

「住民の避難は!?!」

「現在、6割ほど終了!しかしノイズの数が……!」

「くっ……。!打つ手は無いのか!?!」

「指令!ガングニール、天羽々斬両名の側にコードネーム「Hunter
r」の反応が!」

「こんな時にか……。!」

「嘘……。!Hunterがノイズと会敵!ノイズの反応が消滅してい
きます!凄いです……」

「……。彼女は味方なのか?それとも……」

一方、現場では既に MARIA と響の 2 人がノイズを狩り続けていた。MARIA は今回葬送の刃と教会砲、月光の大剣と月明かりの大剣を装備。

響はパイルハンマーと散弾銃、MARIA に持たされた竜狩りの剣槍を装備している。

響にとつては初めての狩り、ぎこちないながらもパイルハンマーを操り次々ノイズを屠っていく。

接近された時は散弾銃を撃ち、囲まれれば竜狩りの剣槍に切り替えて戦技を使う。

横目で響の戦いぶりを見ていた MARIA は内心感心していた。

その時、後ろから巨大な四つ足のノイズが踏み潰そうとしてきたが MARIA は左腕の義手から鉤縄をビルの看板に向けて放ち回避、月明かりの大剣を右手に持ち左腕だけで身体を揺らして飛び上がり月明かりの大剣でぶった斬り教会砲を撃ち込み撃破する。

落ちながら左腕の義手に仕込まれている斧を展開、火打式に強化した斧を纏まっていたノイズに向かって叩きつけた。

その瞬間、炎を纏った斧に MARIA によって改造され仕込まれていた火薬が爆発しノイズが吹き飛び灰となる。

着地の瞬間にノイズが飛びかかってくるが月明かりの大剣から素早く月光の大剣へと持ち替え光波でノイズを斬り裂く。

「・・・全く、数だけはいわねえ・・・。響ー！そつちは大丈夫ー!？」

「はい！まだ大丈夫です！ちゃんとノイズも狩れます！」

「無茶だけはしないようにねー!・・・で、何のようかしら？二課の装者のお二人さん？」

「やつと見つけたぜ。・・・お前、あの子に何をした？」

「何もしてないわよ・・・。ただ、戦う術と私の狩りの技術を教えただけ。それだけよ」

「とにかく、貴方方にはこの後二課に同行して貰います」

「・・・断る、と言ったら？」

「・・・無理矢理にでも連れて行く！」

「ほう？やる気か？ならば、来るがいい」

マリアは月光から落葉に切り替えて連結を解除し二振りの刀へと変える。

そして纏う雰囲気もガラリと変え、殺気を放つ。

マリアから放たれる殺気を受け翼と奏は冷や汗が流れるが翼は刀を握り直す。

奏も槍を握り締めマリアへと向く。

「どうした？来ないのか？」

「っ！ならば私から行かせてもらおう！」

「お、おい！翼！」

「はああああああああああああ！！」

翼が斬りかかってくるがマリアは左手の小刀で軽くあしらう。

そして挑発するように左手の人差指をクイクイツと動かす。

その挑発に乗るかのように頭に血が上った翼は突貫した。

「さあ、リア・アッシュ・ブラッドの狩りを知るが良い」

8話 「激突、狩人と防人」

剣と剣がぶつかり合う音が響くオフィス街。

周りに居るノイズを巻き込みながらぶつかり合う狩人と防人。

互いの得物を振るい目の前の敵を斬り伏せんとする。

それを離れたところで見守る奏、その隣に響がやって来た。

「お隣、失礼しますね奏さん」

「あ、ああ・・・って君は！」

「改めまして、初めまして天羽奏さん。立花響です」

「は、初めまして・・・雰囲気、変わったな？」

「はい、Mar・・・リアさんから狩りの技術や生きる術を学びましたから」

「そうなのか・・・ごめんな、あの事件に巻き込んでしまったばかりに・・・君は平穏な人生を歩むべきだったのにこちら側に来る事になってしまった」

「いえ、これは私が望んで進んだ道です。だから、後悔なんてしてません！」

「そうか・・・なら良かった。それより・・・アレ、止めなくて良いのか？」

そう言っつていつの間にか落葉から右手に千景、左手に混沌の刃、口に綻び刀を咥えて何処ぞの海賊狩りみたいな三刀流で翼の剣撃を捌いているリアがいた。

完全に遊び出している。

響はそんなリアを見て呆れつつ諦めの表情をしていた。

因みに千景は変形後で自傷ダメージで既にHP半分状態なのは内緒だ。

「アレを止めようものなら命が幾つあっても足りませんよ・・・。しかもアレ、遊んでますし半分」

「・・・マジで？」

「本気になったリアさんなら今頃翼さん生きてないですよ」

「・・・(絶句)」

「イチダイ・サンゼン・ダイセン・セカイ。!!!!

「キヤアアアアアア!？」

「あっ・・・」

何処ぞの海賊狩りの必殺奥義をぶちかましていたリアであった。

吹っ飛んだ翼を回収する為慌てて走っていく奏とリアにやり過ぎだと怒っている響であった。

「ごめんごめん、つついやり過ぎちゃった(テヘペロちゃん☆)」

「つついでやるレベルじゃないですよリアさん!!!」

「おーい翼ー?生きてるかー?」

「・・・大丈夫よ奏。まだ生きてるわ」

「良かった・・・立てるか?」

「手を貸してほしいわ・・・足が震えて・・・」

「あいよ。んで、アンタらはどうすんだ?ほんとなら一緒にきてほしいんだが・・・」

「流石に今行くと拘束されかねないからねえ・・・また明日、リディアン前に行くわ。こっちから出向いた方がいいでしょう?」

「場所バレてんのかよ・・・ちよつと待ってくれ。今確認とるから」

奏が何処かに連絡し始めたのでリアは拠点に電話をかける。

未来にも事情を話し明日一緒に来てもらう事にした。

未来も少し迷った後にOKの返事が出たので響に電話を代わり違っていたので響に電話を渡して奏の方に振り向くとちよつど話が終わったのか奏が通信機を切ったところだった。

「それで？どうだったの？」

「大丈夫だそう。それじゃ、待ってるぜ」

「あ、そうそう。もう1人連れて行くけど良いかしら？」

「良いんじゃないか？んじや、またな」

「ちよ、ちよつと奏！そんな勝手に……！ああ、もう！失礼します！」

「ばいばい。それじゃ、響。戻りましょうか？」

「ちよつと待つてください。それじゃ未来、今から帰るね。……うん、

大丈夫だよそれじゃね。リアさん、コレ」

「ん。それじゃ帰る途中で夕飯の材料でも買って帰りましょうか？」

「はい！」

とある森林、人気のないその場所に召喚サインらしきものが描かれ
1人の少女が召喚された。

犬の耳に尻尾の生えたその少女の服装はボロボロな鎧の残骸と布
切れだけである。

そしてその傍には少女には不釣り合いな大剣があった。

刃も鏢もボロボロであり、それでなお未だにその切れ味は失われて
はいない。

灰色の髪の毛と灰色の尻尾を揺らしながら少女は起き上がり眩く。

「・・・主人の墓は私が・・・守る・・・アル〇・・・〇ウス様・・・」

9話 「接触、特異災害機動2課」

「んー・・・どれが良いかしら」

「何してるんですかリアさん？」

ノイズを狩り、ついでの2課の装者ともバトった日の夕食後、リアはリビングに武器を並べていた。

ノコギリ鉋、仕込み杖、黒騎士の斧槍、エストック、鴉羽、ショートソード、レイテルパラツシュ等軽くて扱いやすい物や骸骨車輪の盾、ローゲリウスの車輪、フリーデの大鎌、狂王の磔などの扱い辛いにも程がある武器ばかりであった。

「というか車輪盾に関しては武器では無い。」

「どうしたんですか？武器なんか並べて」

「いやね？未来に使わせるならどんな武器が良いかなあって」

「へあ!？」

「ぶふっ!？」 ↑片付けてた未来

狂王の磔を手入れしながらリアはそう言った。

「な、何で未来にも武器を!？」

「こつちの都合で巻き込んだんじゃないか。貴方も何らかの形で狙われるかもしれないからね。身を守る手段くらいは身につけておいても良いかなって思ってたね」

「確かに・・・でも私重たい物は持てませんよ?」

「そこら辺は追々鍛えて行くから大丈夫よ。とりあえずこの辺りかしら?」

そう言っただけでリアが手に取ったのはレイテルパラツシュとエストックと仕込み杖だった。

尚、一瞬ローゲリウスの車輪や骸骨車輪の盾に目が行っていたのは内緒だ。

「とりあえず軽く振ってみましょ。結構広いし私なら当たっても問題ないから（上位者スマイル）はい、まずはコレね仕込み杖」

「は、はい・・・うわつとと・・・けどそんなに重くない・・・」

「まあ、杖だからね普段は。振ってみて」

「はい！えいっやあ！ハアッ！」

未来は仕込み杖をしつかり握り締めて数回振るう。

ぎこちない振り方だが鍛えれば問題ないだろう。

ちなみにリアは左手にハベルの大楯を持っている。

死ぬつもりはないが死にたくないのだろう。

戦技を使う準備をしている。

因みに響は大扉の盾の後ろにいる。

「それじゃ、次は刃を伸ばしてみて。響、大扉の盾構えてなさい」

「はい」

「は、はい！え、えつと・・・こうかな？あ、出来た」

「さてと私は・・・ふんぬっ！」

そういうとリアはハベルの大楯の戦技、「岩の身体」を発動、全身に岩を纏わせる。

これでも気休めだが何とかなるだろう。

「り、リアさんの全身に岩が生えた!?!」

「だ、大丈夫なんですかりアさん!?!」

「大丈夫よ。ただコレそんなに長く持たないから早くね?」

「は、はい！えい！てやあ！」

「（地味に痛いわねコレ・・・）」↑当たってる。

何度か降っている内に慣れたのか段々と動きが良くなってきている未来。

しかし表情が何かに目覚めそうになっていたので慌てて止めに行くリアであった。

(何度か仕込み杖にしばかれて瀕死だが)

そんな事があったが時間は過ぎ翌日、いつもの狩装束に着替えたりアと響は未来を迎えに行きリディアン前に向かう。

リアは左目の包帯を眼帯で隠しており左腕も外して(懐にいれる)いたのでかなり目立っていた。

リディアン前に着きしばらく待っていると翼と奏、数人の黒服が現れた。

「やあ、お待たせ」

「本部はこちらです」

「お出迎えドーム。さっ、案内して」

「はいはいっと」

「響、未来。行くわよ・・・何してるの？」

「はわわわ・・・本物のツヴァイウイング・・・はふう・・・」

「すいません未来がファンで・・・まあ、私も何ですけど」

「あ、あの！後でサインください！」

「ああ、良いぜ」

「それくらいなら」

右腕の袖辺りに自作の仕込み刃を隠しながら響と未来を伴って奏達に着いていくリア。

左腕の袖が動く度に揺れているのが気になるのかチラチラとリアを見ているツヴァイウイング。

その視線に気づいていたが敢えて無視しているリアであった。そして案内された場所に着くと巨大なエレベーターが現れた。

「リディアンにこんな所があるなんて・・・」

「ほえ・・・」

「何かの砲身みたいねこれ」

「いや唯のエレベーターだからコレ」

「唯の比喻よ、比喻（まあ、知ってるんだけどネ。コレの正体）」

「あーそうそう言い忘れるとこだった」

「ん？」

「（あつ、あれか）」

「しつかり捕まってるよ？・・・飛ぶぞ？」

「ふえ？」

「（「岩の身体」使つとくか）」

瞬間、高速で下降していくエレベーター。

リアはハベル盾を取り出して岩の身体で無理やり自分を固定、響と未来は慌ててリアにしがみ付く。

突然岩が生えてきたリアに驚くツヴァイウイングだったがエレベーターの手すりにしがみ付く事に精一杯であった。

というかいつの間に着替えたのかりアは全身フルハベルであった。

※なおこの後重量オーバーで止まった。

「いやーごめんなさいね？まさか止まるとは思ってなかったから」

「どんだけ重たいんだよさっきの・・・」

「軽く地面が沈むわね」

「よく動けるなアンタ・・・」

「奏、それよりも・・・」

「ああ、分かってるよ。こつちだ、着いてきな」

「はいはいっと。未来、響。起きなさい」

「きゆう・・・」

「・・・仕方がない、・・・よつと。担いで行きますかね」

片腕で未来と響を抱き抱えたりアはツヴァイウイングの2人の後をついていく。

しばらく進むと扉があった。

未来と響の2人はその辺りで起こした。

「あら大きな扉。ここが目的の場所かしら？」

「ああ、そうさ。入ってくれ」

「どんな人がいるんだろう」

「例え悪人だろうと誰だろうと私は未来を守るよ」

「ふふっ、ありがとう響。頼もしいな」

「ここから先は愛想は無用よ。微笑みも優しさも必要ないわ」

「ご、ごめんなさい・・・」

「おい翼。いきなり何言っただ！怖がらせるなよ！」

「事実よ奏。優しさだけでは何も守れないから」

「言いたいことはそれだけかしら？」

いつの間に左腕を付けたのかエヴェリンを翼の後頭部に突き付けているリア。

半分ブチ切れており右手には爆発金槌が起爆状態でセットされていた。

顔の左に巻かれている包帯も目の辺りからうつつすら火の粉が舞っている。

流石にこれには慌てるツヴァイウィングの2人。

しかし既に狩人モードのリアは殺る気なのか腰には綻び刀があった。

背中にはいつの間にかレドの大槌を背負っている。

「何を思ってるのかは知らないけどね、優しさも立派な強さよ。臆病でも戦い続けた戦士を私は知っているわ。太陽のように最期まで心が輝き続けた戦士だっているわ。貴様はそんな人達にも同じ事を言うのか」

「そ、それは・・・」

「わ、悪い！翼！彼女達に謝れ！」

「・・・すまなかつたわね」

「ふん・・・」

とりあえず気は済んだのかエヴェリンを腰に仕舞い爆発金槌とレドの大槌も収納する。

しかし綻び刀だけは腰に納刀したままである。

奏はそんなリアに若干ビビりながら扉を開けて3人を中に連れて行く。

何が起きても必ず響と未来は守りきろうと腰の綻び刀をいつでも抜刀出来る様にしながらついて行くと・・・。

ーパンツ！パンツ！パンツ！

「「ようこそ！人類守護の砦、特異災害対策機動二課へ！」」

「へっ？」

「・・・はっ？」

いきなりクラッカーの音が鳴り響き周りには歓迎ムードとばかりの飾り付けがされている。

明らかに敵対ムードではない雰囲気は驚くどころか呆れ果てたりア。

何が何やら分からない響と未来。

とりあえず敵ではない事が分かったので綻び刀から手を離れたアであった。

10話「自己紹介と一悶着」

いきなりの歓迎にすっかり気押されてしまったリア達。色々諦めたのか差し出された料理を毒味がてら一口食べて毒が入っていないのを確認したリアは響と未来にOKを出す。涎を垂らしまくっていた響は一目散に飛びつき未来はそれをやれやれといった感じで見ていた。

「つたく、いきなり食べ過ぎよ響・・・」

「ハツハツハツ！遠慮なく食べてくれ！まだまだ沢山あるからな！」

「・・・なら私も頂くわ。話はその後でも？」

「ああ、構わんさ」

暫く料理を堪能したりリア達は飲み物を手に取り飲んでいた。

「さて、そろそろ君たちの事について教えて欲しいのだが・・・良いかね？」

「人に名乗らせる前に自分達から名乗りなさいよ（まあ、知ってるけど）」

「確かに、そうだな。俺は風鳴源十郎、この特異災害機動二課の司令をしている」

「私は櫻井了子♪聖遺物に関しては任せてちょうだいな♪さてさて、それじゃ早速脱いで頂戴な」

「ふえ？」

手をワキワキさせながら近づいてくる櫻井了子に呆けた顔をする響と未来。

分かっていた事とはいえリアはため息を吐いて右手にフリーデの大鎌を持ち冷気を帯びたその刃を了子の首元に添える。

左手にはご丁寧に葬送の刃を変形させて持っている。

突然武器を取り出したリアに狼狽る二課のメンバー達。

首に今にも凍りつきそうな程の冷気を発している刃を添えられている了子は冷や汗を掻いている。

「傷口から凍らされるか、首を跳ね飛ばされるか、どっちがお好み？」
「あ、あわわわわわわ・・・」

「か、狩人くん!? 櫻井くんがいきなり失礼なことをしたことは謝る！
頼むからその武器を降ろしてくれ！」

「いきなり脱げとかいう奴は信用ならないんだけど？ 私、似たようなのに騙された過去あるから（主にパッチとか偽フカとか）」

「本当にすまない！ 櫻井くん！ 君も謝るんだ！」

「だってえ・・・この後メデイカルチェックとかする予定だったじゃないのお・・・」

「だとしてもいきなり脱げは無いんじゃないかしら？」

「ご、ごめんなさい・・・」

「ハアツ・・・全く・・・次はないからね・・・知っているとは思っけど改めて、私は狩人、名はリア・アツシユ・ブラッド。本名は訳あって話せない。だからリアと呼んで欲しい。それと・・・響！ 未来！ こっち来てー！」

「もぐもぐ・・・ごくんつ。何ですかあ？ リアさん」

「今行きます」

リアは未だご飯を食べてる響と呆れ顔の未来を呼び寄せる。

あの空気の中ご飯を食べ続けていた響に脱帽する。

「響、未来。自己紹介なさい」

「は、はい！ 私、立花響です！ 狩人としては見習いですがリアさんの弟子として頑張ってますー！」

「私は小日向未来と言います。響の親友です」

「響君に未来君だな。宜しくなー！」

「それと、今この場で言わなければ行けない事がある。この子、立花響は数年前の「ツヴァイウイングの悲劇」に巻き込まれた子よ。天羽奏、

貴方は覚えているでしょう？」

「・・・ああ、覚えてるさ。この前響自身から教えられたしな」

リアが奏に視線を向けると彼女は片手で顔を覆い天を仰いでいた。翼も思い出したのか顔を背ける。

他にも源十郎を始め、何人かの職員にも重い空気が張り詰めた。

その空気を緩和するかのようにはリアは手をパンパンと叩いた。

「さて、辛気臭い空気にしちゃってごめんなさいね？歓迎パーティーの続きしましょ？」

「そ、そうだな！今は楽しんでもらわんとな！さあ、皆！歓迎会の続きだ！」

源十郎の号令で張り詰めていた空気がある程度緩和された。

しかし、ある人物だけは響に視線を向けている。

風鳴翼である。

それを見ていたリアはこの後に起こる事を想像してため息をついた。

11話 「狩人 V S 装者」

「さあ、構えなさい」

「は、はい……」

「まったく……何でこうなるのかしらねえ？」

「すまねえな翼が……」

「……まっ、彼女が納得するならそれで良いかしらね。私もちよつと殺り合いたい気分だったし」

「……今やるの字が違わなかったか？」

「気のせいよ」

何故こうなったか、それは歓迎会まで遡る。

響達が食事をしている時から翼が突き刺すような視線を送っているのに気付いていたリアはため息をつき二課の司令、風鳴源十郎に話しかけた。

「ねえ、彼女のアレ。どうにかならない？」

「……すまない。どうやら翼はまだ君達を認めていないようだな……」

「ハアツ……頭痛いわ」

「了子くんの事も重ねて謝罪する。すまない」

「良いわよ私が過敏なだけだから。さて……どうしますか……」

リアが悩んでいると翼が響の方へと歩んでいく。

嫌な予感を感じたリアも響の方へと向かう。

その腰には既に綻び刀と月派生の打刀が、背中には北のレガリアと探す者の大剣が装備されている。

左腕には暗銀の盾を持ち右手は何も持っていないがいつでも使えるように打刀に右手を添えている。

そんな彼女に気づかず翼は響の前に立つ。

そして……。

「立花響、私と戦いなさい」
「・・・はい？」

特大の爆弾を投下した。

その後はなんやかんやあり（リアが打刀を抜刀しようとしたのを必死に響が止めたり翼がリアと奏を巻き込んで更にめんどくさくなったり）今に至る。

「失望させないでちょうだい」

「あ、あのリアさん・・・わ、私どうすれば・・・」

「殺さない様にやりなさい。大丈夫、私に一撃入れたんだもの。しっかり基本を思い出して」

「は、はい！」

「・・・アンタはどうすんだ？」

「もちろん、貴方とよ」

「だよなあ・・・ハアツ・・・」

「・・・参る！」

翼が握るアームドギアで響に斬りかかるが響も落ち着いてノコギリ鉋と短銃を構えノコギリ鉋で翼のアームドギアを受け止める。

リアはそれを横目に見ながら隙ありと思ったのか突っ込んできた奏のアームドギアを左手につけたセスタスで受け止めパライシして受け流し右手に握る爆発金槌を叩き込む。

（流石に爆発のスイッチは入れていない）

間一髪避ける奏、飛び上がり大量の槍を振らせるがリアは慌てず右手の武器を爆発金槌から獣のタリスマンに持ち替えてソウルの奔流で薙ぎ払う。

（デモンズの武器でダクソの魔術ぶっ放しているが一応デモンズとダクソは精神的に繋がりがあるといふ設定があるので問題なし）

隣では響が短銃を翼に向けて（実際には当たらない様に少しずらして）発砲、それを翼は避け響はノコギリ鉋で斬りかかっているところ

だった。

「槍持ちは正直苦手なのよねえ・・・」次は何を見せてくれるのかしら？」

「へっ、その余裕な表情崩してやるよ！」

※因みに槍持ちは作者も苦手。

(だってパリティタイミング未だに慣れないんだもんアレ)

※同様の理由で斧槍や鎌とかの長物は苦手。

奏が槍を構え直し突撃すると同時に落葉を二刀持ちにして駆け出すリア。

奏が勢いよく突き出した槍を刃を交差させた落葉で受け止める。

踏ん張った衝撃で地面が碎けるがお構いなしに力を込めて槍を弾く。

空中で1回転し着地する奏、その顔を見てリアはスイッチを切り替えた。

獲物を狩るかの如く獰猛な目、幾度なく目にしてきた目だ。

「良いわ・・・もつと、もつと来なさい！天羽奏エ！」

「言われなくてもお！」

一方、響と翼。

ノコギリ鉋で翼の刀を何とか捌いている響。

既に短銃からセスタスに持ち変えている。

隙あらばパリティを取ろうとしているが中々チャンスがなく苦戦している。

しかし、冷静に着実にチャンスを探る。

一方の翼は冷静さを欠いていた。

それはこの模擬戦の直前に櫻井女史から言われたある事が原因だった。

『彼女なんだけど・・・簡易に検査したら GANG ニールの適正があるみたいなのよねえ・・・』

『んな!?!』

『な、何ですって!?!』

『・・・はあ、なんか嫌な予感してたけど・・・(知ってはいたけどやっぱり面倒臭い事になったわね・・・)』

彼女の相棒である片翼の戦う力を使える。

それを聞いた翼は行き場のない怒りを響に向けていた。

理不尽な事は理解している、けれども彼女を簡単に認められないのも事実だ。

彼女の、奏の隣に立てるのは私だけだ。

そんな気持ちで戦っているからか翼の太刀筋は当然鈍る。

響が何とか食らいつけている理由はそれである。

攻めきれない事に焦った翼は刀を大上段に構えるがそれを見逃す程、響は甘くないしそんな柔な鍛え方はされていない。

「ハアアアアアッ! (獲った!)」

「甘いですよ、翼さん! ハッ!」

振り下ろされる刀をセスタスでパリイして弾く。

まさかという表情になり弾かれた事で体制が崩れる翼。

その瞬間、右手を思いつき強く握りしめた響の拳が翼の鳩尾に突き刺さる。

胃から内容物が逆流してくる感覚と共に翼は意識を手放した。

「翼ア!?!」

「余所見厳禁よ」

「・・・アッ」

一瞬、翼に気を取られた奏はリアがフルスイングしたプラムドで壁に叩きつけられて気絶した。